

日本色彩学会誌 論文執筆要領

1984(昭和59)年12月18日制定

2001(平成13)年8月25日改訂

2013(平成25)年3月1日改訂

2016(平成28)年7月1日改訂

一般社団法人日本色彩学会 学会誌編集委員会

本執筆要領は、日本色彩学会誌に投稿する論文の執筆に際し、主に形式的な表現の統一をとるために守るべき基本事項をまとめたものである。

1. 記述言語

論文記述に用いる言語は、原則として日本語とする。ただし著者の母語が日本語でない場合、英語による原稿も認める。以下は、日本語による記述に適用する。

(1) 文章

文章は、口語、現代仮名遣い、漢字仮名交じり文、常用漢字を用いる。句読点は、コンマ(,)とピリオド(.)を用いる。段落ごとに改行するものとし、段落始めの文頭は1字下げる(空ける)。

(2) 用語

専門用語については、原則として、文部省学術用語集や、JIS Z8105(色に関する用語)、JIS Z8120(光学用語)など、日本工業規格に規程されている用語に準拠すること。省略記法は、専門外の人にも分かるように、初出で完全つづり(や正式名称)を添えておくことが望ましい。

(例) ... ICT (Information and Communication Technology, 情報通信技術)の発展から、...

国名・地名・人名などは、原つづりまたは仮名書きとし、仮名書きの場合は、初出で原つづりを添える。

2. 論文原稿の構成

論文原稿は、表題部(タイトルページ)、本文、著者紹介をもって構成する。このうち表題部は刷り上り1ページとする。表題部と本文と著者紹介のページ数は、合わせて日本色彩学会 論文投稿の手引き2.1節に定められた上限を超えてはならない。下表参照。

論文の種類別	ページ数の上限
原著論文	10 (12)
研究速報	6
研究資料	10 (12)

(括弧内は、編集委員会が認めた場合。)

2.1 提出原稿の体裁

学会誌1ページの刷り上りは、原則として横書き1行24字、1段44行の2段組で、本文の書体(フォント)は明朝体である。提出原稿も、刷り上りページ数を見積もりやすいように、A4判用紙(縦置き)に横書き1行24字、44行の2段組を原則とする。なお、本文の書体は明朝体が望ましい。

図や表は原稿中に埋め込んでも良い。この場合、刷り上りのレイアウトを想定した原稿を作成し提出してもらえ

ると、著者の意図が版下作製者に伝わりやすい。図や表を原稿中に埋め込まない場合は、原稿の図や表の参照箇所の近くにその挿入箇所を明記すること。図や表の掲載位置は、実際のレイアウトの状況により、必ずしも指定した位置にならないことがある。

図を本文中に埋め込んだ場合もそうでない場合も、別紙として図や表を添付し、合わせて図や表の番号と表題の一覧表を添付すること。

図は、そのまま縮尺印刷できるように、鮮明なものを用意する。図や表の画像としての推奨解像度は、600dpi以上である。刷り上りサイズは、原則として、左右幅72mm(1段の幅)あるいは153mm(2段にわたる場合)となる。

電子記録媒体(CD、DVDなど)を用いて電子ファイルにより図や表を提出する場合は、必ずそれを紙媒体に印刷したものを合わせて提出すること。また、電子ファイルを解読するために必要な情報(画像やファイルのフォーマット、必要なアプリケーション等)を合わせて示すこと。なお、編集委員会に対応できない形式の電子ファイルについては、編集委員会が指定する形式に変換したものの再提出を求める場合がある。

2.2 表題部

表題部は、表題、著者とその所属、アブストラクト(要旨、概要)とキーワードの順に、それぞれ和文と英文で書く。表題部は横1段組となる。ただし、本文は横2段組となる。

(1) 表題

表題は簡潔で内容を具体的に表すものとし、まず和文で、ついで英文で書く。

(2) 著者とその所属

著者とその所属は、まず和文で、ついで英文で書く。著者が複数のときは、著者それぞれにつき和文と英文で書く。

(3) アブストラクトとキーワード

アブストラクトとキーワードを、それぞれ和文と英文で書きこの順に並べる。(和文アブストラクトの下に和文キーワードを、英文アブストラクトの下に英文キーワードを書く。)

アブストラクトは、本文の内容(目的・方法・結果など)を簡潔にまとめ、容易に理解できるように、平易な文章で書く。長さは、和文アブストラクトでは400字程度、英文アブストラクトでは200語程度とする。キーワードとして、論文内容に最も関連の深い語を、3語以上6語以内を選ぶ。

(例) キーワード：三刺激値、色知覚、等色。

Keywords: tristimulus values, color perception, color matching.

2.3 本文

本文は、原則として、序論(意義・背景・目的など)、本論(準備・実験手法・調査方法・結果・考察・評価など、研究方法により異なる)、結論、今後の課題、参考文献の順に、研究内容を整理し、章、節、項などに区分し、専門家でもなくともおよその筋がつかめるように、分かりやすく書く。場合によっては、本文末に付録を付けても良い。注記が必要なときは、脚注とする。

(1) 章・節・項の記法

原則として、「第1章 序論」、「第2章第1節 実験方法」などとせず、たとえば、(章は)「1. 序論」、(節は)「2.2 実験方法」のように、数字とピリオドで番号付けする。すなわち、章は「1.」、「2.」など、節は「1.1」、「1.2」など、項は「1.1.1」、「1.1.2」などとする。項以下は、章、節ごとに(1), a)なども可とする。

(2) 図および表

図や表には、図1○○○、表1△△△などと、それぞれに論文を通じての通し番号と表題を付ける。図や表の表題は、簡潔でかつその内容を十分に表すものとする。本文中で参照されない図や表があってはならない。

図や表に、キャプション(説明書き)を付けても良い。

図の番号・表題は図の下に、表の番号・表題は表の上に表示す。

(例)

表1 赤い岩絵具の測色値

名称	マンセル値	CIEXYZ値
辰砂	3.0R 4.4/7.8	(20.78, 14.72, 11.98)
赤口本朱	4.3R 4.3/10.3	(21.63, 13.78, 8.588)
岩紅	7.1R 4.1/12.6	(21.61, 12.64, 4.207)
古代朱	4.2R 4.2/8.3	(18.81, 12.88, 9.170)

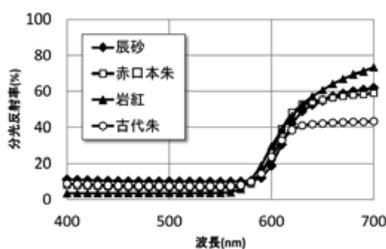


図1 赤い岩絵具の分光反射率

図や表(やキャプション)については、本文が日本語であっても、「Fig.1 ◇◇◇」、「Figure 1 ◇◇◇」、「Tab.1 ×××」、「Table 1 ×××」などと、和文の後に、英文表記を併記しても良い。

図や表を他の著作物から引用・転載する場合は、出典を図や表の下に明示し、必要に応じて原作者または著作権所有者から使用許可を得ておく。

(3) 数と量、数式

数は単位をもたず、量は単位をもつ。単位は、JIS Z8202(量記号、単位記号及び化学記号)、JIS Z8203(国際単位系

(SI)及びその使い方)に準拠すること。

(例) 123.4, 78.9 cd/m².

数や量を表記するときの書体は、原則として、変数や変量など変わるものに対してはイタリック(斜体)を、定数や定量など変わらないものに対してはローマン(立体)を用いる。

(例) e(自然対数の底), π(円周率), $y = \log_{10}(x+1)$, $a_i (i=1, 2, \dots, n)$, a_{\max} , dy/dx , $\int f(x) dx$.

単位記号は、(不変なので)ローマンの書体を用いることに注意すること。また、一般に、人名に由来する単位は、大文字で表す。

(例) 60.5kg, 9.8W(ワット, 仕事率の単位)。

変数や変量に用いる記号は、慣例に従うのが望ましい。一般に、集合や行列や点を表すには、ローマ字やギリシャ字の大文字を、数やベクトルを表すにはローマ字やギリシャ字の小文字を使うことが多い。特定の変数や変数を表す記号については、色に関してはJIS Z 8105を、光に関してはJIS Z 8120を、照明に関してはJIS Z 8113を参照すると良い。

未定義な記号使いや、曖昧な数式表現は避けること。たとえば、定積分であれば積分範囲を書かなければならないし、関数(や写像)であれば定義域および値域を明確にしなければならない。

上付きや下付きの添え字は一段とし、多段の添え字をできるだけ避ける。(避ける例) x_{ij} .

分数式において、上下2行にわたる表記は避けることが望ましい。ただし、上下に分けたほうが理解しやすいなど必然性がある場合は、この限りではない。

(例) $(a+b)/(a+b)$ のように書き、 $\frac{a+b}{c+d}$ のような表記は避けることが望ましい。

数式における括弧は、大、中、小の順に、それぞれ{} (弓括弧), [] (角括弧), () (丸括弧)とする。

(例) $\{a+x[b/(1+x)-c]\}^2$.

弓括弧{}は集合の、角括弧[]は行列やベクトルの外延的表現(要素から構成される様子を直接書いた表し方)にも用いられる。行列やベクトルを表記する(数や量の配列をまとめる)括弧に丸括弧を用いることは避ける。

(例1) 元 a_1, a_2, \dots, a_n からなる集合: $\{a_1, a_2, \dots, a_n\}$.

(例2) 2行3列の行列: $\begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \end{bmatrix}$.

3要素の行ベクトル: $[a_1, a_2, a_3]$.

3要素の列ベクトル: $\begin{bmatrix} a_1 \\ a_2 \\ a_3 \end{bmatrix}$

(行列要素の区切りのコンマ(,)は省略しても良い。)

数式も、一つの文章として読めるように、必要に応じて句読点を付ける。

数式を参照するために、数式の出現順に番号を丸括弧に入れて数式の右端に付す。文中ではこの番号で参照する。

(例1) 関数 f を次のように定義する:

$$f(x) = k \exp(1-x). \quad (7)$$

(例2) 関数 g を,

$$g(x) = k \log_e(1+x). \quad (8)$$

により定義する。

(例3)式(9)を変形すれば、式(10)が得られる。

(4) 参考文献

論文を書く際に引用した文献(引用文献)や、参考にした文献(参考文献)を、区別せずに参考文献と呼ぶ。ここに、文献とは、雑誌、図書、論文集、会議資料、ウェブサイト、などを言う。

著者は参考文献を明示し、読者がその文献に辿り着けるだけの十分な書誌情報を示さなければならない。それにより、著者と読者が、既存の論点を整理し、論文の新規性、独創性、信頼性を明確にすることが出来る。

参考文献は、公開既発表および公開予定の一次資料とする。著者が読んでいない資料に依拠することは、論文の信頼性を欠くことにつながる。なお、未公開の資料について言及する必要がある場合は、脚注とする。

本文中で文献を参照する場合は、参照箇所の直後あるいは文末に、参照番号を角括弧[]に入れて添える。参照番号は、本文における参照順の通し番号とする。

(例1) これまでの研究成果[1]によれば、...

(例2) ... は、文献[2,p.123]による。

(例3) ... であることが知られている[3,4など]。

参照した文献は、本文における参照順に(欧文、和文を問わずに)、本文の末尾にまとめて列記する。文献ごとに、角括弧に入れた参照番号に続けて、書誌情報を記述する。この記述も文章とみて、文末にピリオドを付けることを忘れないように。(どの参考文献も、必ず本文中で参照されていない。)

書誌情報の記述は、原則として、科学技術情報流通技術基準SIST 02-2007に準拠するものとする。この記述スタイルは、現在国際的に広く通用しているNLM(米国国立医学図書館、生医学分野)、ACS(アメリカ化学会、化学分野)、IEEE(米国電気・電子技術者協会、工学分野)、APA(アメリカ心理学会、学際分野)、MLA(米国現代言語協会、人文・社会科学分野)などの記述スタイルを参考に、長年にわたる調査研究の結果、独立行政法人科学技術振興機構(JST)により制定された基準である。SIST 02は、広い分野に違和感なく適用可能な合理的な記述スタイルである。

以下、まず記述の原則を簡単に述べ、そのあとに、若干の具体例を、参照番号を付した形で示す。詳細は、上記文献(インターネットで無料公開されている)を参照されたい。

SIST 02における書誌情報は、1°著者に関する書誌要素(著者名、編者名、訳者名など)、2°標題に関する書誌要素(論文名、雑誌名、書名、会議予稿集名、会議報告名、規格名など)、3°出版に関する書誌要素(出版者、出版年、巻・号・ページ、規格番号など)、および4°注記的な書誌要素(オンライン文献の入手日付、記録媒体など)から構成され、この順序に記述する。1°から4°の各グループはピリオドで区切り、各グループ内の書誌要素は原則としてコンマで区切る。

著者名は、姓、名の順とする。欧文の場合、姓と名はコンマで区切る。名は、原資料中の表記に従い、省略するこ

とを避ける。著者が複数のときは、すべての著者を列記するのが望ましいが、第2著者以下を、和文では「他」、欧文では「et al.」を用いて略記しても良い。各著者は、和文の場合はコンマで、欧文の場合はセミコロンで区切る。

論文名や書名は、原資料に記載されている通りに記述し、副題は標題の後にコロンで区切って記述する。雑誌名については、和文の場合は完全誌名を記述する。欧文の場合は略記しても良い。

出版年は西暦年とし、アラビア数字で記述する。巻・号は、「vol.12, no.3」のように、「vol.」に続けて巻数を、「no.」に続けて号数を、ともにアラビア数字で記述する。ページは、複数ページの場合は「p.開始ページ番号-終了ページ番号」、単一ページの場合は「p.ページ番号」とする。

次の記法は、慣習との整合性を考え、SIST 02にはないが許容することとする。ただし、一論文の中では、首尾一貫しなければならない：1°欧文による氏名の記述について、第2著者以下の名は、頭字を用いて略記しても良い。2°出版年を、出版に関する書誌要素の最後に書いても良い。3°複数ページの記法として、「pp.開始ページ番号-終了ページ番号」も良い。

以下に、参照番号付きの書誌情報の記述例をいくつか挙げる。

a) 雑誌に掲載された論文の場合

著者名. 論文名. 雑誌名. 出版年, 巻, 号, ページ.

(例)[1] Miura, Kumiko; Saito, Miho. Harmonious Color Model with Fragrances. *Color Research and Application*. 2012, vol.37, no.3, p.219-232.

[2] 大槻理恵, 富永昌治, 引間理恵. 光学特性に基づいた口紅塗布面の表面分光反射率の推定. *日本色彩学会誌*. 2011, vol.35, no.4, p.287-298.

巻・号・ページの記法で、vol.xx, no.yy, p.aaa-zzzは、xx(yy), aaa-zzzと略記しても良い。なお、雑誌名として略号を用いる場合は、日本色彩学会編 色彩科学ハンドブック(第3版)の凡例にある欧文誌の略号、あるいはこれに準じるものを使用すること。

b) 図書の場合

著者名. 書名. 版表示, 出版社, 出版年, 総ページ数.

(例)[3] 照明学会編. 照明ハンドブック. 第2版, オーム社, 2003.

[4] Wyszecki, Günter; Stiles, W.S. *Color Science: Concepts and Methods, Quantitative Data and Formulae*. 2nd ed., John Wiley & Sons, 1982, 950p.

版表示は、初版の場合は省略できる。

c) 会議報告書あるいは会議要旨集の一論文の場合

著者名. "論文名". 会議報告書名. 会議開催地, 会議期間, 主催機関, 出版者, 出版年, ページ.

(例)[5] 溝上陽子. "白色LED光源下における色の見え". 日本色彩学会第43回全国大会要旨集(日本色彩学会誌, vol.36, suppl.). 京都,

2012-05-25/27, 日本色彩学会, 2012, p.10-11.

主催機関と出版者が同じ場合, 前者を省略できる. 会議開催年と出版年が同じ場合, 出版年を省略できる.

d) 規格文書の場合

規格番号:制定年. 規格標題. 出版者.

(例) [6] JIS Z 8105:1982. 色に関する用語. 日本規格協会.

出版者は省略しても良い.

e) ウェブサイトの場合

文書による書誌情報を記述した後に, 入手先と入手日付を必ず入れる.

(例) [7] 科学技術情報流通技術基準 参照文献の書き方(SIST 02). 独立行政法人科学技術振興機構(JST). http://sist-jst.jp/handbook/sist02_2007/main.htm, (参照2012-05-19).

この例は, 著者名がない文献をウェブサイトで参照した例である.

(5) 脚註

脚注は, 該当箇所の右肩に^{1, 2, 3}, などの注番号をつけ, 原稿用紙下欄に, 注番号とその内容を記載すること. (刷上りでは, 該当ページの下部に印刷される.)

(例) 本研究は... を目的とする¹.

(脚注の例)¹ 本研究の一部は, 科学研究費補助金○○○○の援助を受けて行われた.

2.4 著者紹介

著者紹介として, 著者の写真と略歴を掲載する. 写真は, 上半身(顔写真), 縦29mm×横23mmとし, 解像度は600dpi以上が望ましい. 著者略歴は, 次の該当する項目について簡潔に記す.

氏名(ふりがな), 最終学歴, 学位・称号など, 所属学協会, 現職, 専門領域.

著者が複数のときは, 著者それぞれにつき写真と略歴が必要. 論文の載録決定後に, 最終原稿提出と同時に提出すること.

(例)

顔写真(上半身)

写真掲載サイズ
H29mm×W23mm
推奨解像度600dpi

すずきあやこ
鈴木彩子

2008年, 東京美術大学大学院美術研究科修士課程修了. 修士(美術).

日本色彩学会, 日本心理学会, (社)色材協会.